室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ポリネシア諸語における二つのタイプのコピュラ構文について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2007-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): copulative construction, verbless sentence, nominal predicate, Polynesian 作成者: 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/88

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ポリネシア諸語における二つのタイプのコピュラ構文について

その他（別言語等）のタイトル	Two Types of Copulative Constructions in Polynesian Language
著者	塩谷　亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	53
ページ	77-85
発行年	2003-11
URL	http://hdl.handle.net/10258/88

室工大紀要第53号（2003）77～85

ポリネシア諸語における二つのタイプのコピュラ構文について

塩谷亨*1

Two Types of Copulative Constructions in Polynesian Languages

Toru Shionoya

(原稿受付日　平成１５年５月６日　　論文受理日　平成１５年８月２９日)

Abstract

The meaning expressed by copulative constructions can be divided into two categories: 1) identification, and 2) attribution. Some Polynesian languages have a single copulative construction used for both identification and attribution, while other Polynesian languages have two distinct constructions; one is for identification and another is for attribution. The copulative construction used in the former group is structurally similar to the one used for identification in the latter group.

Keywords : Copulative construction, Verbless sentence, Nominal predicate, Polynesian

１　はじめに

１．１　「A は B だ」という文の意味

日本語の「AはBだ」という構文は実にいろいろな状況で用いられる便利な構文である。日本語と英語の表現を対照してみると、日本語で「AはBだ」という構文で表される状況の多くは英語では“A is B.”（*is*については人称や時制の変化も含む）のような構文で表されることがわかる。しかしながら、更に別の言語を見てみると、日本語では「AはBである」という構文で、英語では“A is B.”という構文で表されるいろいろな状況について、複数の異なる構文を使い分けらなければいけない言語もあるという事実は、エスキモー語（1）を始めいろいろな言語について指摘されている。

今回は「A は B である」という表現が表す様々な状況について、同定と属性という二つの場合に分類し、それぞれポリネシア諸語においてどのような構文で表現されるのか分析する。

同定とは、A と B という二つのものが存在し、それらが同一であるような関係を表す場合、すなわち A=B であるような関係を表す場合である。

（1）　この人は太郎だ。

ここでは「この人」＝「太郎」という同定関係を示している。この場合 A と B を置き換えても意味は変わらない。

属性とはAというものがBという属性を持っているという関係をしめす場合である。言い換える

*1 共通講座

と、B という属性を持つ集合の中に A が構成員として属していることを意味し、A⊂B のような関係として表すことができる。

（2）　この人は学生だ。

ここで「学生」というのは「この人」の属性である。学生という属性を持つ集団にこの人が属していることを意味する。

上記の例文が示すように日本語では同定も属性も同じように「A は B だ」という同じ構文で表すことができる。英語でも同様であり、やはりコピュラ(be 動詞)を用いた同じ構文で同定と属性を表すことができる。

（3）This man is Taro.

属性を表す構文も構造的には全く同じである。

（4）This man is a student.

例文（3）と（4）の違いは *is* の後ろに来る名詞句の性質及び冠詞の有無だけである。

しかしながら、同定と属性を表す構文が必ずしも一つであるとは限らない。ポリネシア諸語の中には同定と属性がそれぞれ異なる構文で表される言語がある。本稿の目的は同定と属性という二つの範疇分けを軸にポリネシア諸語間でコピュラ構文の比較対照を行うことにある。

１．２　ポリネシア諸語間の対照研究の意義

ポリネシア諸語とは地理上のポリネシア（ハワイ諸島、ニュージーランド、イースター島と結ぶ三角形の中）で話されている諸言語及びミクロネシア、メラネシアの一部で話されているいわゆる域外ポリネシアの諸言語から成るグループである。

ポリネシア諸語は祖先を同じくする同系の言語グループである。同一の祖語から図１が示すように枝分かれしていったと考えられており、その枝分かれに沿っていくつかの下位グループに分かれている[(2)]。今回取り上げたのはトンガ語（トンガ語群）、サモア語、トケラウ語、ピレニ語（以上サモア・域外ポリネシア語群）、ハワイ語（東部ポリネシア諸語マルケサス語群）、タヒチ語、マオリ語、クック諸島マオリ語（以上東部ポリネシア諸語タヒチ語群）、イースター島語（東部ポリネシア諸語）の合計９つである。上記のうちピレニ語はソロモン諸島の言語であり、地理的な区分であるポリネシアの外に位置する域外ポリネシアの言語である。今回はポリネシア諸語の全体像に少しでも近づくため、ポリネシア諸語の各々の下位グループについて最低一つ網羅するようにした。

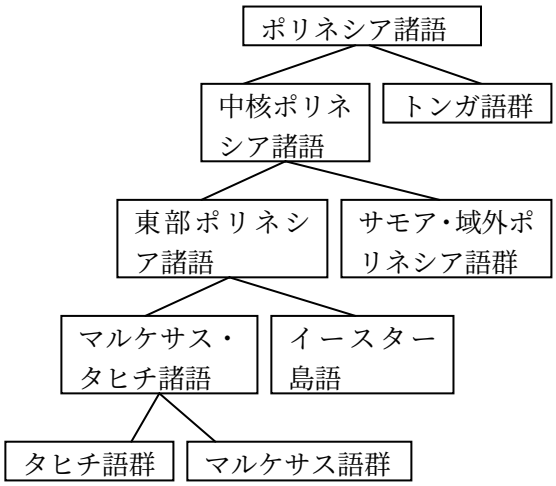

図１　ポリネシア諸語系統概念図

ポリネシア諸語にはサモアとトンガのように古くからカヌーでの交流が続いていた地域もあるが、地理的に孤立していて長い間他の地域との交流が途絶えていた地域もある。例えばサモア語とハワイ語では彼らの祖先が分かれてから千年を超える長い年月を経ている。このような事実にもかかわらず言語的には文法的にも語彙的にも極めて類似している。そのため、同様の意味を表す文を複数の言語で並べてみた場合、単語と単語をほぼ 1 対 1 で対応させながら比較対照することが出来る場合が多い。例えば「あなたの名前は何ですか」という意味を表すハワイ語、タヒチ語、サモア語の文を並べてみると次のようになる。

（5）　「あなたの名前は何ですか」

ハワイ語	'O	wai	kou	inoa?
タヒチ語	'O	vai	tō 'oe	i'oa?
サモア語	'O	ai	lou	igoa?
	～だ	誰	あなたの	名前

このように語順が同一である場合が非常に多いことに加えて、*'o*「～だ」、*wai*～*vai*～*ai*「誰」、*inoa*～*i'oa*～*igoa*「名前」のように、単語の多くも同系とみなされるものが多いため、ある言語の例文のどの部分が別の言語で対応する例文のどの部分に

対応しているかという判断が容易である。そのため、どこが類似しているのか、どこが相違しているのか、比較対照が非常にしやすいと言える。

ポリネシア諸語には「A は B だ」のように二つの名詞句を連結するコピュラ構文が存在する。以下ではポリネシア諸語を構成するいろいろな下位グループについていろいろな研究者によってなされた記述研究に基づきそれぞれの言語で同定及び属性を表すのにどのような構文が用いられているのか列挙、整理し、それぞれの構造について一般化を試みる。

2　ポリネシア諸語の同定と属性コピュラ構文

2．1　トンガ語

Shumway[(3)]のデータに基づいてトンガ語のコピュラ構文の概要を示す。まず同定を表すコピュラ構文は次のようになる。

（6）Ko　e　tohí　eni.
前置詞 冠詞 本(定) これ
「これは（君が言っていた）本だ」

ここでは「これ」と「(君が言っていた)本」が同一物であることを示す同定の表現である。前置詞 ko が同定の述語名詞句を導く機能を持っている。この例では *Ko e tohí*「（君が言っていた）本だ」が述語名詞句であり、 *eni*「これ」が主語名詞句である。従って、語順は＜述語名詞句-主語名詞句＞である。

属性を表す例は次のようになる。

（7）Ko　e　tohi eni.
前置詞 冠詞 本 これ
「これは本だ」

ここでは、「これ」が「本」という属性を持つ集合の構成員であることを示す属性の表現である。例文（6）とは違い特定の「本」と同一であることを示しているのではない。構造的には例文（6）と全く同様である。両者の違いは述語名詞句に定アクセントと呼ばれるアクセントが付いているか否かだけである。定アクセントは定(definite)の名詞を印すアクセントである。

以上は最もシンプルな例で示したが、いろいろなタイプの名詞句が述語名詞句や主語名詞句に来てもやはり同様の構文で表される。ここでいくつか他の例を挙げると、例えば、名詞の後ろに修飾語句が付加された場合｛例（8）｝、主語に代名詞が来る場合｛例（9）｝、主語に固有名詞が来る場合｛例（10）｝でも同じ構文で表される。

（8）Ko　e　fale lelei　e　falé　ni.
前置詞 冠詞 家　良い 冠詞 家（定）この
「この家は良い家だ。」

（9）Ko　e　faiako au.
前置詞 冠詞 先生　私
「私は教師だ。」

（10）Ko　e　fonua sai　'a　Vava'u.
前置詞 冠詞 土地 良い　焦点 Vava'u
「Vava'u は良い土地だ」

以上は＜述語名詞句-主語名詞句＞の語順の例であったが、コピュラ構文の語順は＜主語名詞句-述語名詞句＞のようになることもある。

（11）Ko　e　faiakó　ko　e fefine
前置詞 冠詞 教師(定) 前置詞　冠詞 女性
talavou.
きれいな
「（その）先生はきれいな女性だ」

例文（11）では属性のコピュラ構文の主語名詞句 *e faiakó*「（その）女性」が文頭に来ている。その際に前置詞 *ko* が付加されている。これは left-dislocation の例と考えられる。トンガ語等多くのポリネシア諸語では強調したい名詞句などを left-dislocation によって文頭に持ってくることがしばしば見られる。left-dislocation では、主語名詞句が文頭に移動するが、その際、文頭に来る名詞句には前置詞 *ko*(言語によっては *o*）が付加される。この前置詞はトピックマーカー等と呼ばれるもので、文頭に移動した名詞句に付加されるものである。述語名詞句を導く *ko* とは別の機能であると考えられる。

同定のコピュラ構文での left-dislocation の例は Shumway[(3)]には示されていないが、Tu‘inukuafe[(4)]に次のような例がある。

（12）Ko　hoku hingoa ko　Sione.
前置詞 私の 名前　前置詞 Sione
「私の名前は Sione だ。」

この例では主語名詞句 *hoku hingoa*「私の名前」が文頭に来ている。属性のコピュラ構文の場合と同じくトピックマーカーの前置詞 *ko* が付加されている。

２．２　サモア語

サモア語の名詞文の構造はトンガ語のそれと同様である。Hunkin[5]のデータによりサモア語のコピュラ構文の概要を示す。

まず同定のコピュラ構文は次のようになる。

（13）‘O　　lō mātou　　fale lenei.
　　前置詞　私たちの　家　これ
　　「これは私たちの家だ。」

同定の述語名詞句 *‘O lō mātou fale*「私たちの家だ」であり、前置詞*‘o*（トンガ語の前置詞 *ko* と同系）が述語名詞句を導いている。語順も＜述語名詞句-主語名詞句＞である。

属性のコピュラ構文の構造も全く同一である。

(14) ‘O　　le　　lā‘au lenei　mea.
　　前置詞　冠詞　木　　この　もの
　　「これは木だ。」

やはり、前置詞*‘o* が属性の述語名詞句を導いている。同定と属性のコピュラ構文の違いは述語名詞句が指す内容だけである。

更に、トンガ語と全く同様に、主語と述語の語順が逆になる left-dislocation の例もある。例文(15)は同定の、例文(16)は属性のコピュラ構文でそれぞれ主語名詞句が文頭に来る例である。

（15）‘O　　a‘u ‘o　　le　　tama.
　　前置詞　私　前置詞　冠詞　男の子
　　「私は男の子だ。」
（16）‘O　　Lagi ‘o　　le　　fōma’i.
　　前置詞 Lagi 前置詞　冠詞　医師
　　「Lagi は医師だ。」

文頭に移動した名詞句に前置詞*o*（トンガ語の *ko* と同系）が付くのもトンガ語と同様である。

２．３　トケラウ語

以下、Hooper[6]のデータに基づきトケラウ語のコピュラ構文を概観する。

同定のコピュラ構文については、トンガ語、サモア語のそれと同様である。述語名詞句を導く前置詞は *ko* である。

（17）Ko　　Tinilau ma　　Hina te　　ulugālī.
　　前置詞 T.　　と　　H.　冠詞　夫婦
　　「夫婦は Tinilau と Hina だった。」
（18）Ko　　tana　gāluega　tēnā.
　　前置詞 彼の　仕事　　それ
　　「それは彼の仕事だ。」

属性のコピュラ構文についてはトケラウ語はトンガ語やサモア語と少々異なっている。述語名詞句を前置詞 *ko* が導くのは同じであるが、不定冠詞 *he* が付いている場合、前置詞 *ko* を省いても良いという点である。

（19）(Ko)　he　　ika　tāua　　te　　atu.
　　前置詞 冠詞 魚　貴重な 冠詞 カツオ
　　「カツオは貴重な魚だ。」

前置詞 *ko* があれば、同定のコピュラ構文と同じだが、前置詞 *ko* がなければ不定冠詞 *he* で始まる別の構文になる。

トンガ語、サモア語と同様に、主語と述語の語順が逆になる left-dislocation の例もある。例文(20)、例文(21)がそれぞれ同定のコピュラ構文及び属性のコピュラ構文の主語が文頭に移動した例である。

（20）Ko　　nā　　tino　iēnā　　ko　　ona
　　前置詞 冠詞・複 人　　あの　前置詞 彼の
　　lava　　hoāvaka.
　　自身の クルー
　　「あの人たちは彼自身のクルーだ。」
（21）Ko　　te　　atu　　(ko)　　he　　ika tāua.
　　前置詞 冠詞 カツオ 前置詞 冠詞 魚 貴重な
　　「カツオは貴重な魚だ。」

２．４　ピレニ語

Næss[7]のデータに従って、ピレニ語のコピュラ構文のパターンを示す。

同定の表現として次のような例が挙がっている。

（22）Ko　　to　　ilamotu.
　　前置詞　あなたの　甥
　　「あなたの甥だ。」

主語名詞句は省略されているが、述語名詞句を前置詞 *ko* が導いている。

属性の例として次のようなものが示されている。

（23）A　Lupa e　hahine lāvoi.
冠詞 Lupa 冠詞 女性　美しい
「Lupa は美しい女性だ。」

この例では *e hahine lāvoi*「美しい女性だ」が属性の述語名詞句であり、冠詞 *e* が属性の述語名詞句を導いている。主語名詞句は *A Lupa* であり、語順は＜主語名詞句-述語名詞句＞となっている。

他の大多数のポリネシア諸語で基本語順が＜述語-主語＞であるのとは異なり、ピレニ語の基本語順は＜主語-述語＞である。従って、例文(23)はむしろ基本的なコピュラ構文の例であり、left-dislocation の例ではないと考えられる。

２．５　イースター島語

主にDu Feu[8]のデータに基づいてイースター島語のコピュラ構文の概要を示す。

同定のコピュラ構文については次のような例が示されている。

（24）To‘oku　ingoa　ko　Vero.
私の　名前　前置詞 Vero.
「私の名前は Vero です。」

述語名詞句は*ko Vero*「Veroだ」であり、前置詞koがそれを導いている。語順は＜主語名詞句-述語名詞句＞のようになっている。Du Feu[8]には同定のコピュラ構文と考えられる例で＜述語名詞句-主語名詞句＞のような語順のものは見当たらないが、Fuentes[9]のデータに例文(24)と逆の語順の例がある。

（25）ko　kori　tooku ingoa.
前置詞 Kori 私の　名前
「私の名前は Kori だ。」

ここで、例文(24)が例文(25)のような形の文の left-dislocationであると判断するべきかどうかは明確ではないが、Du Feu[8]によれば前置詞*ko*は述語名詞句を印す機能を持つとされているので、それに従えば、これまでに見てきた前置詞*ko*～*‘o*が導くコピュラ構文の例と考えてよいだろう。

属性のコピュラ構文については次のように＜主語名詞句-述語名詞句＞（例文(26)）、＜述語名詞句-主語名詞句＞（例文(27)）の二通りの語順がDu Feu[8]に示されている。

（26）To’oku　taina　he　profesor.
私の　兄弟　冠詞　教師
「私の兄弟は教師だ。」

（27）He　hi　ika te　anga　o to’oku taina.
冠詞 釣り 魚 冠詞 仕事 の 私の 兄弟
「私の兄弟の仕事は魚釣りだ。」

２．６　マオリ語

マオリ語のコピュラ構文についてHarlow[10]に基づいて概観する。

同定のコピュラ構文の構造は次のようになっている。

（28）Ko　Rei tōku ingoa.
前置詞 Rei 私の 名前
「私の名前はレイだ。」

（29）Ko　te　Pirīmia tēnei.
前置詞 冠詞 首相　これ
「こちらが首相だ。」

このように前置詞 *ko* が同定の述語名詞句を導いている。語順は＜述語名詞句-主語名詞句＞のようになっている。

また、属性のコピュラ構文は次のように冠詞 *he* が属性の述語名詞句を導く。

（30）He　kai-whaka-ako a　Mere.
冠詞　教師　冠詞 Mere
「メレは教師だ。」

また、主語名詞句が left-dislocation により移動する例もある。同定のコピュラ構文である（28）の主語名詞句が文頭に来ると次のようになる。

（31）Ko　tōku　ingoa ko　Rei.
前置詞 私の 名前 前置詞 Rei
「私の名前はレイだ。」

文頭に持ってこられた主語名詞句に前置詞 *ko* が付くのは、トンガ語等と同様である。

属性のコピュラ構文の left-dislocation の例は見

当たらない。

２．７　クック諸島マオリ語

Carpentier and Beaumont[11]に基づき、クック諸島マオリ語のコピュラ構文を概観する。

同定のコピュラ文では、次の例のように、前置詞 *ko* が述語名詞句を導く。語順も＜述語名詞句-主語名詞句＞である。

（32）Ko　Teariki　tōna　ingoa.
前置詞 Teariki　彼の　名前
「彼の名前は Teariki だ。」

属性のコピュラ構文は冠詞 *e* が述語名詞句を導く。

（33）E　tiōka　tērā.
不定　チョーク　あれ
.　「あれはチョークだ。」

２．８　タヒチ語

Académie tahitienne[12]のデータに基づき、タヒチ語のコピュラ構文を概観する。

同定のコピュラ構文では前置詞 *'o* が述語名詞句を導く。語順も＜述語名詞句-主語名詞句＞である。

（34）‘o　Teri‘i　tōna　metua tāne
前置詞　T.　彼の　父
「彼の父は Teri‘i だ。」

属性のコピュラ構文は冠詞 *e* が述語名詞句を導く。

（35）e　fa‘ehau terā　ta‘ata
冠詞　兵士　あの　人
「あの人は兵士だ」

２．９　ハワイ語

以下にElbert & Pukui[13] のデータに基づきハワイ語のコピュラ構文を概観する。

同定のコピュラ構文では、前置詞 *'o* が述語名詞句を導く。語順も＜述語名詞句-主語名詞句＞である。

（36）‘O　Pua　ko’u　inoa.
前置詞 Pua　私の　名前
「私の名前は Pua だ。」

属性の場合には冠詞 *he* が述語名詞句を導く。

（37）He　kumu　‘o　Pua
不定　教師　前置詞 Pua
「Pua は教師だ。」.

２．１０　まとめ

同定と属性を表すコピュラ構文を対照した結果、今回調べたポリネシア諸語を三つのグループに分類することが出来る。

グループ１はトンガ語とサモア語である。これらの言語では同定と属性に単一のコピュラ構文を用いる。そのコピュラ構文は前置詞 *ko*～*‘o* によって導かれる名詞句が述語名詞句を成すものである。

表１　グループ１

	述語名詞句を導く要素	
	同定	属性
トンガ語	前置詞 *ko*	
サモア語	前置詞 *‘o*	

グループ２は東部ポリネシア諸語のイースター島語、マオリ語、クック諸島マオリ語、タヒチ語、ハワイ語、そしてサモア・域外ポリネシア語群のピレニ語からなる。これらの言語においては、同定と属性では別の構文を用いる。同定では前置詞 *ko*～*‘o* に導かれる名詞句が述語名詞句を成し、属性では冠詞 *he*～*e* が導く名詞句が述語名詞句を成す。

表２　グループ２

	述語名詞句を導く要素	
	同定	属性
ピレニ語	前置詞 *ko*	冠詞 *e*
イースター島語	前置詞 *ko*	冠詞 *he*
マオリ語	前置詞 *ko*	冠詞 *he*
クック諸島マオリ語	前置詞 *ko*	冠詞 *e*
タヒチ語	前置詞 *‘o*	冠詞 *e*
ハワイ語	前置詞 *‘o*	冠詞 *he*

グループ３はサモア・域外ポリネシア語群に属するトケラウ語である。トケラウ語では同定は前置詞 *ko* が導く名詞句を述語名詞句とするコピュラ構文で表す。属性も同様に前置詞 *ko* が導く名詞句を述語名詞句とするコピュラ構文で表すことも

あるが、前置詞 *ko* を省略することもでき、その場合には冠詞 he が導く名詞句を述語名詞句とするコピュラ構文となる。そのような意味で上述のグループ１とグループ２の中間的なタイプと言える。

表３　グループ３

	述語名詞句を導く要素	
	同定	属性
トケラウ語	前置詞 *ko*	前置詞 *ko* 又は 冠詞 *he*

３　考察

３．１　**“What is 〜? ”と"Who is 〜?"**

ここまで、いろいろなポリネシア諸語のコピュラ構文を同定と属性の二つの範疇に分類して来たわけであるが、その際の判断の主要な根拠は、それぞれの研究者の分析や例文の訳であった。

ここでは、より客観的な、比較可能な形で、今回の範疇分けを支持する根拠を示すために、“Who is 〜? ”「A は誰だ」と“What is 〜? ”「A は何だ」の二つのタイプの疑問文が、どちらのコピュラ構文で表現されるかという比較を試みる。

“Who is 〜? ”「A は誰だ」は典型的には A をある特定の人物と同定するための質問であり、同定のコピュラ構文が期待される。一方、“What is 〜? ”「A は何だ」は典型的には A という物がどんな属性を持つ集合の構成員であるのかを問う質問であり、属性のコピュラが期待される。

そこで、同定と属性のコピュラ構文の区別をする言語（前節で示したグループ 2 とグループ 3 の言語）に属する言語のうちピレニ語を除く 6 言語について“Who is 〜? ”「A は誰だ」というタイプの疑問文の例と、“What is 〜? ”「A は何だ」というタイプの疑問文の例を列挙し比較対照する。ピレニ語については該当する例が見当たらなかった。

“Who is 〜? ”「A は誰だ」という疑問文は次のようになる。

トケラウ語
（38）Ko　ai te　tino tē(ia)?
前置詞 誰 冠詞 人　あの
「あの人は誰だ。」

イースター島語
（39）Koai　te　me‘e nei?
前置詞＋誰 冠詞 ものこの
「これは誰だ。」

マオリ語
（40）Ko　wai tōu　ingoa?
前置詞 誰 あなたの　名前
「あなたの名前は何(誰)だ。」

クック諸島マオリ語
（41）Ko　‘ai tō‘ou　metua va‘ine?
前置詞 誰 あなたの　母親
「あなたの母親は誰だ。」

タヒチ語
（42）‘O　vai terā ta‘ata.
前置詞 誰　あの 人
「あの人は誰だ。」

ハワイ語
（43）‘O　wai ke　kumu?
前置詞 誰 冠詞 教師
「先生は誰だ。」

以上のように、予測どおり、全て同定のコピュラ構文が用いられていた。

次に“What is 〜? ”「A は何だ」という疑問文は次のようになる。

トケラウ語
（44）He　ā　tēnā?
冠詞　何　それ
「それは何だ。」

イースター島語
（45）He　aha te　me‘e　nei?
冠詞 何 冠詞 もの この
「これは何だ。」

マオリ語
（46）He　aha te　mea　rā?
冠詞 何 冠詞 もの あの
「あれは何だ。」

クック諸島マオリ語
（47）E　a‘a　teia?
冠詞 何　これ
「これは何だ。」

タヒチ語
（48）E　aha tō ‘oe　tōro‘a?
冠詞 何　あなたの 職業
「あなたの職業は何だ。」

ハワイ語

（49）He　　aha kēlā?
　　冠詞　何　あれ
　　「あれは何だ。」

以上のように、予測どおり、全て属性のコピュラ構文が用いられていた。

“Who is 〜? ”「A は誰だ」という疑問文には同定のコピュラ構文と分類したものが、そして、“What is 〜? ”「A は何だ」という疑問文には属性のコピュラ構文が、それぞれ一貫して用いられた。この結果は、今回の同定と属性という範疇分けを支持するものと考える。

３．２　同定の述語名詞句を導く *ko〜‘o*

トンガ語とサモア語の述語名詞句、そして他の言語の同定の述語名詞を導く *ko〜‘o* についてここまで前置詞として提示してきた。それぞれの研究者もその点ではほぼ一致しているようであり、また、この分析よりも効果的な分析は今のところ見当たらないので、ここではこの問題に付いては深く議論しない。

一つだけ根拠を挙げると、同定の述語名詞を導く *ko〜‘o* は他の前置詞と同じ分布を示すということである。名詞句内で前置詞が占めるスロットは一番先頭に位置している、言い換えると、名詞句の一番先頭に来るのが前置詞だということである。従って、冠詞等の限定詞がある場合、前置詞はそれよりも前に置かれることになる。今回提示した同定の述語名詞を導く *ko〜‘o* はいずれも、限定詞の前に来るものであり、他の前置詞と共起することもない。その意味で、名詞句構造を考えると前置詞的であると考えられる。

３．３　属性の述語名詞句を導く *he〜e*

属性の述語名詞句を導く *he〜e* についてはこれまでは便宜上冠詞として提示して来た。実際多くの言語についてはそれぞれの研究者が *he〜e* を冠詞として、具体的には不定冠詞として分析している。しかしこのような分析には以下のような注釈が必要である。

マオリ語とハワイ語ではコピュラ構文と同じ構造で*he*の後ろに名詞ではなく状態動詞が来ることがある。*he〜e*を冠詞と分析すれば、そのような例では状態動詞が名詞的に用いられていることになる。Harlow[10]とElbert & Pukui[13]はそれぞれ次のようなマオリ語の例（50）、ハワイ語の例（51）を名詞文の例としてあげている。

（50）He　reka　ēnei　kai.
　　不定 おいしい これ（複）食物
　　「これらの食物はおいしい」
（51）He　poepoe ka　honua.
　　冠詞 丸い　冠詞 地球
　　「地球は丸い、地球は球だ。」

それぞれ、状態動詞（Harlow は動詞の一種として形容詞と分類）*reka*「おいしい」と状態動詞 *poepoe*「丸い」が不定冠詞 *he* に導かれて述語を形成している名詞文として分析している。

これらの例文は本稿で属性のコピュラ構文としてこれまで例示して来たものと全く同じ構造をしている、違いは、*he* の後ろに名詞がくるかそれとも動詞の一種が来るかという点である。意味を考えても、例文(50)、例文(51)で *he* が導く述語句が表しているのはそれぞれ「この食べ物」と「地球」の属性である。この点も、名詞に付いていた場合と同じである。従って、名詞の前に付く *he* と状態動詞の前に付く *he* は同じものであると考えるべきであろう。そこで *he* を冠詞とみなせば *he* が付いた状態動詞は名詞的に用いられていることになる。

一方、塩谷[14]がハワイ語について可能性を指摘しているように*he*を時制・相マーカーの仲間として分析することもできよう。この分析に従うと、*he*の後ろに用いられている名詞は名詞的というよりむしろ動詞的に用いられていると分析される。しかしながら、名詞が他の時制・相マーカーとほとんど共起しないという事実を考えると、なぜ*he*とだけは自由に共起するのかということを説明する必要が生じる。

この段階でどちらの分析がより効果的か判断することはしないが、ここにもう一つの別の可能性に言及したい。それは、*he*を冠詞とも時制・相マーカーとも分類しない、つまり、*he*が導く述語句が名詞句であるとも動詞句であるとも明示しないという分析である。このような分析を示した例として、Bauer[15]はマオリ語について、属性の述語を導く*he*を冠詞や前置詞、時制・相マーカー等の語類には含めずにclassifying particleのような意味的な指標だけを与えている。

ポリネシア諸語のように名詞と動詞の区別が明確ではない言語での機能語の分析は、むしろその

ような名詞と動詞の区別に中立的な分析の方が効果的かもしれない。ある単語を動詞と分類すべきか名詞と分類すべきかという議論にはさほど実りが無い場合も多いように思える。

ハワイ語の場合にも、*he* は後ろに来るものが名詞であれ動詞であれいずれにせよ属性を表す述語を導く語である、つまり、*he* は属性のマーカーであり、その後ろに来るのは名詞でも動詞でもどちらでもよい、と分析しておくのがより効果的かもしれない。

また、更に問題を複雑にしているのは、マオリ語においても、ハワイ語においても、*he* には属性の述語句を導く以外にも用法があるということである。*he* が何であるかという問題を考えるには述語名詞句を導くということ以外の *he* の用法を含めて各個別言語の分析をさらに進める必要がある。

4　結び

東部ポリネシア諸語のコピュラ構文はお互いにかなり類似していた。系統的にも近い言語同士なのでこのことはむしろ当然のことかもしれない。しかしながら、ピレニ語やトケラウ語は系統的にはサモア・域外ポリネシア語群に属し、東部ポリネシア諸語よりはサモア語に近い言語である。それにもかかわらず、同定と属性に別々のコピュラ構文を用いるという点ではむしろサモア語よりも東部ポリネシア諸語に類似した構文を用いていることは極めて興味深い。

今回調べた全ての言語について、前置詞 *ko*～*'o* が導く名詞句を述語とするコピュラ構文が見られた。この構文が歴史的にも最も古い時代から存在した可能性を示唆している。

一方、冠詞（便宜上こう呼ぶ）*he*～*e* が導く名詞句を述語とするコピュラ構文についてはサモア語とトンガ語では見られない。この構文がもし東部ポリネシア諸語だけの共通の要素であれば、東部ポリネシア諸語の祖先がサモア・域外ポリネシア語群と分かれた後に発達した構文であるという仮説が立てられる。しかしながら、この構文はサモア・域外ポリネシア語群に属し、東部ポリネシア諸語よりはサモア語に近い言語であるピレニ語やトケラウ語にも存在する。この事実は、*he*～*e* が導く名詞句を述語とするコピュラ構文或いはその基となる要素がサモア語・域外ポリネシア語群が東部ポリネシア諸語と別れる前という古い時代から既に存在したかもしれないという仮説を立てられる可能性があることを示している。この仮説に従えば、当然のことながら、なぜトンガ語とサモア語にはこのような構文がないのか説明する必要が生じる。

今回は歴史言語学的な議論には入らないが、今後更に他のポリネシア諸語のデータも併せて考察したい。

謝辞

この研究は平成 12 年度～13 年度文部省科学研究費補助金奨励研究（A）「名詞文・数詞文等の基本構文に関する諸問題解明のためのポリネシア諸語間の対照研究」（課題番号 12710273）による研究成果であり、同科研費最終年度にまとめた「ポリネシア諸語の名詞文・数詞文」の中のコピュラ構文に関する部分を改訂・拡大したものである。

文献

（１） 宮岡伯人, エスキモー極北の文化誌, 岩波新書, (1987)
（２） 亀井孝･河野六郎･千野栄一編, 言語学大辞典, 第 3 巻, 三省堂, (1996)
（３） Shumway, Eric B., Intensive Course in Tongan, rev.ed, Laie: Brigham Young University-Hawaii, (1988)
（４） Tu'inukuafe, Edgar, A simplified dictionary of modern Tongan, Auckland: Pacifika Press, (1992)
（５） Hunkin, Galumalemana A. L., Gagana Samoa, Auckland: Polynesian Press, (1988)
（６） Hooper, Robin. Tokelauan, Munchen-Newcasttle: Lincom Europa, (1996)
（７） Næss, Åshild, Pileni, Munchen-Newcasttle: Lincom Europa, (2000)
（８） Du Fu, Veronica, Rapanui, London-New York : Routledge, (1996)
（９） Fuentes, Jordi, Dictionary and grammar of the Easter Island, Santiago: Editorial Andres Vello, (1960)
（１０） Harlow, Ray, Maori, Munchen-Newcasttle : Lincom Europa, (1996)
（１１） Carpentier, Tai T.T. and Clive Beaumont, Kai Kōrero, Auckland: Pacifika Press, (1995)
（１２） Académie tahitienne, Grammaire de la langue tahitienne, Papeete: Fare Vana'a, (1986)
（１３） Elbert, Samuel H., and Mary K. Pukui, Hawaiian grammar, Honolulu: University of Hawaii Press, (1979)
（１４） 塩谷亨, 動詞類と名詞類の区別の普遍性について-ハワイ語における品詞分類への適用-, 室蘭工業大学紀要, 第 50 号 (2000), p.141-148
（１５） Bauer, Winifred, Maori, London-New York : Routledge, (1996)